

め で る

vol. 5



米原市上板並地区の皆さんと

2013.12

目次

Contents

●スポットライト 「地域医療は“三方よし”の理念で」

長野県厚生連 佐久総合病院 名誉院長 夏川 周介 2・3

●特集① 夏の宿泊研修 in 彦根・米原方面 4~16

●特集② わらじ先生からのメッセージ

総合人間研究所 所長 早川 一光 17

●病院紹介 草津総合病院／高島市民病院 18~21

●看護学生向け情報 保健師の仕事について 22・23

●「人」 機構監事 滋賀医科大学ボランティア連絡協議会 会長 熊澤 孝久 24・25

報告／会員の状況・入会のご案内／編集後記 26~28

長野県からふるさと滋賀を応援する

地域医療は “三方よし”の理念で



夏 川 周 介

長野県厚生連 佐久総合病院 名誉院長
長野県滋賀県人会 会長
NPO法人滋賀医療人育成協力機構 正会員

終戦前年の昭和19年に創立された佐久総合病院は来年70周年を迎えます。人口1万数千人の寒村の地に、医師2人、20床の創立時から、現在、老健までを含む全病床数は千床を超え、職員総数2千百名余、研修医を含む常勤医師数は210数名を数えています。

発展の過程を規模だけから見ると、まさに戦後の復興から高度成長への道をひた走ってきた我が国の姿と生き写しの感があるのは否めません。しかし、内実は困窮劣悪な農村地域に身を置き、戦後の工業社会の実現と生産優先の政策から取り残され、そのひずみを様々な形で受けた農村、農民の環境と健康を守るため、昭和20年に赴任し、50年間にわたり院長を務めた若月俊一の指導のもと、地域に根ざした地道な包括的医療活動の結果であると考えています。

創立期は有史以来大きく変わることの無かった日本の農村・農民の劣悪な生活環境、作業内容からくる健康障害に対し、その解明と改善をはかった農村医学と予防医学創生の時期でした。出張



▲馬車に乗って出張診療（1945）

診療班を編成し、無医村に出かけ、保健予防活動に力を注ぎました。演劇による健康啓発・教育は子供から大人まで幅広い共感をよんだものです。昭和22年からは毎年病院祭を開催し、一般住民への衛生思想の普及を図りました。昭和34年には近隣の全村健康管理活動を行い、その健康増進および医療費減少効果から、昭和48年には健康管理センターを創設し、県下全域にわたる集団健康検診を展開しております。このような成果は昭和58年の老人保健法制定へとつながったと考えています。



▲ドクターヘリ導入（2005.7）



その後の高度経済成長時代は、生産優先政策から生じる農薬中毒、農機具災害などの環境汚染や健康障害から農民の健康を守るたたかいの時期であり、農村医学研究所を設立し科学的、実証的研究に取り組んできました。同時に一次から三次予防まで都会に負けない医療の提供を目的に、最先端の医療施設・機器・技術の導入をはかり、農村医学のメッカとして国際的にも評価されるようになりました。

そして、現代は高齢化社会への対応として、昭和62年には国のモデル事業として全国初の老人保健施設を開設しております。昭和63年に始まった在宅ケア組織は平成6年に地域ケア科として確立し、訪問診療、訪問看護を積極的に行い、一次診療圏内の人口当たり利用率は全国平均の4倍に上っています。

救急医療分野においては神奈川県に匹敵する面積を有する3次医療圏唯一の救命救急センターとしてその運営に意を注ぎ、平成17年にはドクターヘリを導入しています。

早くから医学生、研修医の教育にも積極的に取り組み、昭和43年からの臨床研修指定病院として、現在まで延べ428名の初期研修医を受け入れてきました。滋賀医科大学からは過去4名が研修し、うち一人は消化器内視鏡診断・治療の世界的権威として、もう一人は在宅医療の全国的エキスパートとして病院運営を支えています。

年間2百数十名の医学生が実習見学に訪れますが、今年9月には滋賀医科大学から5名の4年生グループ（男性3、女性2）が5日間の研修に来てくれました。学生さんからの要望により、朝5時からの農業体験実習を含む、かなり密度の濃いプログラムでしたが、全員意欲的に取り組み、佐久病院のスローガンである“農民とともに”“予防は治療に勝る”の意味をそれぞれに実感、理解してくれたのではないかと思います。

私事ですが、彦根市出身の故に今年4月に長野県滋賀県人会会長に就任しました。これを縁に、さらに滋賀医科大学および滋賀県ともさまざまに交流を深めていければと考えています。そして近江商人の活動理念である“三方よし”に倣い、“患者によし、医療者によし、世間によし”の精神で、より良い地域医療の実践に、ともに歩いていけることを心から願っています。

夏川 周介

1945年（昭和20年）滋賀県彦根市生まれ
大学卒業後、長野県厚生連 佐久総合病院に
外科医長、副院長、院長を経て、現在名誉院長
2012年（平成24年）から滋賀医療育成協力機構正会員



▲ 3月開院の佐久医療センター全景

夏の宿泊研修

in 彦根・米原方面



「彦根・米原方面の医療と歴史・文化を学ぶ」と題し、8月28日(水)～29日(木)の2日間、滋賀県で学ぶ医学生・看護学生や滋賀県出身の医学生・看護学生を対象に地域・医療理解の為に宿泊研修を実施しました。今回は、滋賀医科大学と自治医科大学の医学生合わせて16名を含む総勢25名での研修となりました。



1日目

米原市の地域見学を行い、彦根市の病院を訪問しました

伊吹山（登頂・見学）

滋賀県の最高峰である伊吹山を山頂駐車場から登頂しました。山頂付近の登山道では、たくさんの高山植物も見ることができました。



彦根市立病院（説明・見学）

「彦根市立病院での救急医療について」と「医師が働きやすい職場づくりについて」の話を聞き、内科カンファレンスを見学しました。



彦根グランドデュークホテル（交流会・宿泊）

交流会第1部

講演／米原市福祉支援局 局長 馬 渕 英 幸 氏
テーマ「米原市の現状と10年後を見据えた医療福祉の在り方」

講演／彦根市立病院 副院長 日 村 好 宏 氏
テーマ「在宅医療支援への取り組み」

コメンテーター／地域包括ケアセンターいぶき センター長 畑 野 秀 樹 氏

交流会第2部

研修先の先生方や滋賀医科大学里親学生支援事業の里親・プチ里親の方々にご参加いただき、それぞれのお立場からご意見をいただき、貴重な交流の場となりました。



2日目

米原市上板並地区の訪問、彦根市の地域見学、豊郷町の病院を見学しました

地域包括ケアセンターいぶき（地域交流・昼食）

上板並地区の住民の方々とタウンミーティングに参加しました。昼食は、地域の方々による手作りの郷土料理をいただきました。



彦根城（見学）

国宝 彦根城や玄宮園を自由見学しました。



豊郷病院（説明・見学）

豊郷病院の創立者のお話などを聞き、精神科病棟・回復期リハビリテーション病棟などを見学しました。



■ 基幹病院としての 在宅医療への取り組み

彦根市立病院 副院長 **日村 好宏**



8月の酷暑の中、宿泊研修に参加された医学生の皆さん、ご苦勞様でした。交流会では、近い将来、わが国が経験したことのない超高齢化社会を迎えるにあたり、この地域の基幹病院である彦根市立病院が果たす役割について紹介しました。まだ実地医療を経験していない皆さんには、実感しにくい地味な話になったようですが、熱心に聴いていただきました。

地域の基幹病院の大切な役割として、急性期医療や専門的医療を提供することは言うまでもありません。彦根市立病院は、医療の最後の砦として、24時間365日重症患者の受け入れを行っています。一方、急性期医療を終えた方は、退院後も疾病管理の継続が必要ですが、高齢で通院の出来ない方は、“かかりつけ医”の先生方が往診し、多職種とかわりながら、生活を支える医療すなわち“在宅医療”が行われます。しかし在宅医療に携わる多くの先生から、患者の状態が悪化した場合やレスパイト入院（病状の悪化は無いが、介護する家族の負担を軽減するための一時的な入院）が必要なときに、病院の対応が不十分であるとの指摘を受けていました。

このような状況の中で、彦根市立病院は、在宅医療を理解し、それを支える取り組みを行う必要があると考え、在宅医療を支えるために3つの新たな取り組みを始めました。

一つは、病院電子カルテの患者情報をITで診療所へ開示する。二つは、“かかりつけ医”の先生に入院指示の権限を与え、スムーズな入院・退院連携を行う。最後に、病院の医師、歯科医師、認定看護師が在宅へ出向き在宅医療の支援を行うなどです。

近い将来、超高齢者社会を迎えるにあたり、在宅医療に依存する度合いが多くなります。今まで以上に、在宅医療を担う“かかりつけ医”の先生と地域の基幹病院が連携し、急性期医療から在宅医療まで切れ目のない医療サービスを提供することが、地域に根ざした基幹病院の超高齢化社会における重要な使命と考えます。

熱意のある若い医学生諸君、皆さんが第一線で活躍する頃の2025年には、団塊の世代が疾病年齢(75歳)を迎え、入院を必要とする患者が増加します。限られた医療資源を、皆さんの知恵と努力で有効に効率よく活用していただくことを期待しています。



▲交流会では、ひこにゃん参上。はいピース!!



▲交流会で講演される日村副院長

■ 米原市の現状と 10年後を見据えた医療福祉の在り方

米原市福祉支援局 局長 馬 淵 英 幸



米原市は、平成17年に旧坂田郡の4町が合併してできた市で、面積は、250.46平方メートル、人口は、40,558人（平成25年10月1日現在）で、水と緑に代表される豊かな自然と歴史・文化に恵まれたまちです。県内最高峰の日本百名山である伊吹山とそこに植生する高山植物、初夏の風物詩である幻想的なホタルの乱舞、清流で知られる醒井地蔵川の梅花藻などが有名です。歴史・文化の面では、各地に伝えられる豊作を祈願するという豊年太鼓踊りや、日本三大奇祭として知られる鍋冠祭りをはじめ、先人の努力により、多くの伝統文化が引き継がれています。

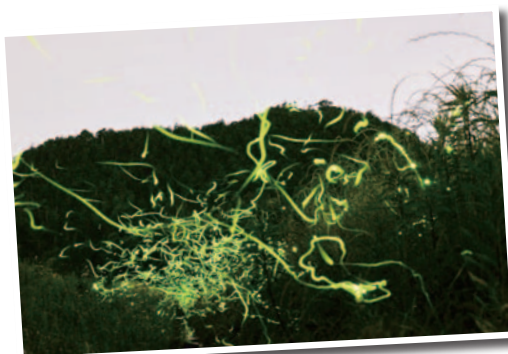


▲伊吹山頂は、高山植物がいっぱい

さて、米原市の医療福祉の現状であります。医療分野では、総合病院はなく、国民健康保険直営診療所、民間の医院も含めて、18の医療機関があり、市民の健康予防・地域医療の確保に貢献いただいています。また、介護サービス事業所は、市内外の拠点を中心にさまざまな高齢者の自立支援のための各種サービスを提供しています。

次に、米原市の高齢化率は、直近の平成25年10月1日現在では、26.04パーセントとすでに4人に1人の割合を超えました。これと連動する形で、要介護認定者、要介護認定率、1人あたりの介護給付費とともに年々増加傾向にあり、国・県の平均値よりも高い値とする傾向が続いています。

市では、今後人口の高齢化が着実に進むことが予測されることや、ちょうどこの8月に出されました国の社会保障制度国民会議報告において、これから必要とされる医療の内容は、「病院完結型」から、「地域完結型」への転換を打ち出していることなどから、現在市を取り巻く医療や介護の課題を整理し、10年先を見据えた行政戦略としての、米原市独自の保健・福祉・医療（医療福祉）連携モデル構想＝略して米原モデル構想を立て、強力に推進することを打ち出しました。この米原モデル構想は、高齢者が在宅で安心して暮らせるよう、地域医療を中心に、医療福祉の多職種が連携するしくみと、24時間体制で支えるサービスを組み合わせた総合的な事業を展開するものです。



▲ホタルの乱舞



▲可憐な醒ヶ井地蔵川の梅花藻



▲豊年太鼓踊り

具体的には、①身近なところで、よりきめ細やかな相談支援および関係機関・関係団体との連携を図るため、サブセンター化を含めた地域包括支援センター機能の強化です。②家庭や地域で尊厳をもって、安心して暮らし続けるには、医療機関および在宅ケアを支える関係者が、医療、看護および介護のサービスを継続的かつ包括的に提供できるよう、医療と介護の連携強化のしくみをつくることです。

③在宅ケアと在宅医療の中心的役割を担う24時間対応の在宅療養支援診療所機能を、福祉圏域ごとに確保することです。④地域包括ケアシステムの構築するうえで、多様なニーズに応え、関係者をつなぐ地域福祉の推進です。⑤在宅医療や在宅看取りについて、一定の理解が深められるよう、一般市民向けの幅広い啓発活動の展開を図ります。

最後に医療福祉連携の重要性は、今後確実に高まることが予想され、その中心である地域医療をしっかりと支えることで、在宅療養を確保し、強固な連携体制が可能となります。米原市は、美しい自然と伝統文化の息づく中で、米原モデル構想の早期実現を図り、だれもが住み慣れた地域や家庭で安心して暮らせることのできるまちをめざしてまいります。



▲鍋冠祭り

■米原市の現状と課題

①高齢者の現状と課題（高齢化の進展と要支援者の現状）

H22年度	山 東	伊 吹	米 原	近 江	計
人 口	13,104人	5,750人	11,699人	10,495人	41,048人
高 齢 者 数	3,256人	1,566人	3,137人	2,215人	10,174人
高 齢 化 率	24.85%	27.23%	26.81%	21.11%	24.79 %
要介護認定率	16.9%	18.4%	18.7%	17.5%	17.7 %
一人暮らし高齢者	188人	106人	217人	134人	645人

※民生委員パースデイ訪問事業調査による実数（自治会内に子が居住する者を除く。）

H33年度	山 東	伊 吹	米 原	近 江	計
人 口	11,798人	5,346人	10,316人	10,819人	38,279人
高 齢 者 数	3,564人	1,587人	3,368人	2,502人	11,021人
高 齢 化 率	30.2%	29.7%	32.6%	23.1%	28.8%

米原モデル

高齢者等が在宅で安心して暮らせるよう、地域医療を中心に保健福祉の多職種が連携する仕組みと24時間体制で支えるサービスを組み合わせた総合的な事業

1. 地域包括ケア体制を構築
2. 医師の確保に向け環境づくり
3. 重症化予防（リハビリ、認知症）の取り組み強化
4. 新たな地域での支え合い体制を構築

社会保障制度改革国民会議報告書（抜粋）

H25, 8, 6

（医療・介護分野）

- ・「病院完結型」 ⇒ 「地域完結型」
- ・医療と介護の見直し
- ・医療の在り方についての国民の理解と協力

米原市のめざす医療福祉の基本的方向

- ① 地域包括支援センター機能強化
- ② 医療と介護の連携強化
- ③ 24時間在宅医療支援拠点施設の整備
- ④ 地域福祉の推進
- ⑤ 地域啓発事業の展開

夏の宿泊研修
2日目企画

「地域の人と語り合おう」

■タウンミーティングを引き受けて

地域包括ケアセンター いぶき センター長 畑野 秀 樹



この企画の数か月前に、滋賀医大より埴田先生、NPO法人滋賀医療人育成協力機構の中森さんが訪問いただき、学生さんたちのために半日を使っていいから何かやってくれないかと依頼をいただきました。学生さんたちに、地域医療を知ってもらうにはどうしたらいいのか考えた結果、地域の人に直接聞くような機会を設けてみてはどうかと思いつき、タウンミーティングを提案しました。埴田先生には快く承諾いただき、ありがとうございました。

どの集落に話を持ちかけてもよかったのですが、とりわけ高齢化が進み過疎が進む集落をなんとか住みやすい地域にしたいと熱心に活動されている上板並集落の伊賀並正信さんに頼むことにしました。いきなりお願いでしたが、「先生のためなら何でも引き受けます」と二つ返事で快諾していただくことができました。場所については、上板並の住民が集まりやすいところであり、ケアセンターいぶきの出張所のある万傳寺を提案してみました。「地域を知るなら、その地域の歴史や文化も知ってほしい」と伊賀並さんからも提案があり、ありがたいことにタウンミーティングの後に昼食も用意したいとおっしゃっていただきました。伊賀並さんをはじめ、この企画に準備・協力していただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

今回は、滋賀医大から12名、自治医大から4名の学生さんが参加され、また東京北社会保険病院の研修医でケアセンターいぶきに研修中であった呉先生、滋賀医大の学生さんで早期体験実習に来ていた澤村さんにも参加してもらいました。イベントが近づくにつれ、若い学生さんがはたして田舎の高齢者たちと話しが盛り上がるのだろうか、と心配していましたが、全く杞憂で、非常に楽しんでもらったように思いました。どの学生さんも真面目で熱心であり、前日の交流会においても、大勢の前で自己紹介や自分の将来の夢を堂々と話しておられ、将来が非常に楽しみな逸材ばかりと感心しました。

このタウンミーティングの目的として、①滋賀医大・自治医大の学生さんに「地域で医療すること」を学んでもらうこと、②米原市上板並の魅力を知ってもらうこと、③地域包括ケアセンターいぶきと地域住民との関わりについて知ってもらうこと、としました。



▲畑野先生、開会のあいさつ

上板並の皆さんには、伊賀並さんより声をかけていただき20名余りに参加を呼び掛けてもらいましたが、当日は呼び掛けていない人まで来ていただき、名札がなくなるうれしい悲鳴でした。ただ、何をやるのかわからずに来た人が多かったため、「今日は皆さんが先生役になってください」と打ち合わせをし、学生さんたちをお迎えしました。

万傳寺の畳の間に、地域住民と学生さんが集団お見合いのように向い合せに座っ



▲万傳寺からみた風景



▲万傳寺



▲地域代表 伊賀並さんのお話

ありましたが、すぐになじみ、あちこちで笑いが漏れてくるようになりました。地域の皆さんにとっても自分たちの身近なお寺が会場になったことで、話しやすかったのではないかと思います。

【地域の魅力】についての意見

自然が豊かなところ。春夏秋冬の景色がすばらしい。人情味があるところ。高齢者が仕事をしていると何も言わなくても若い人が助けてくれる。雪が積もっても地域の人が協力して除雪してくれる。葉草を干して煎じて飲んでるので元気。畑に歩いて行けるので足腰が丈夫。車に乗れば、長浜に行ったり、米原駅に行ったりも容易で交通のアクセスがいい。近くにはケアセンターいぶきがあるし、市立長浜病院、長浜赤十字病院にも近い。

2題目は「ケアセンターいぶきと地域住民の関わり」についてグループワークをしてもらいました。このテーマは伊賀並さんからの提案でした。

【地域包括ケアセンターいぶきと地域住民とのかかわり】についての意見

安心して診てもらえる。丁寧に診察してもらえるし気楽に話せる。何でも聞いてくれる。外来は出張所でもセンターでも診てもらえる。通院できなくなったら往診してもらえる。介護が必要になったら、施設に入所させてもらえる。急性期は長浜の病院で診てもらうが、安定すると地元で紹介してケアセンターで診てもらえる。何でもケアセンターの先生に相談したら、適切に専門医に紹介してもらえる。自分の親も診てもらったし、私たち夫婦も診てもらっているし、娘たちも孫たちも診てもらえる。院内で薬が処方してもらえる。ただし出張所だと院外処方なので不便を感じる。院外処方より院内処方のほうがいい。待ち時間が長いので1～2時間に1本のバスに間に合わないときがある。ずっと先生はいてもらえるのか？ 出張所が廃院になったら困る。

米原市には入院できる病院がありません。医療資源や介護サービスも十分とは言えません。そのハンディキャップを補うために、ケアセンターいぶきは地域住民が安心して暮らし続けてもらえるような取り組みを続けてきたつもりです。外来や往診など医療サービスのほかに、住民の生活を支えるケアマネジャー、訪問看護、リハビリ、ショートステイ、入所、デイケアといった介護保険サービスの提供をしています。私たちは「地域が病院であり、

電話がナースコール、道路が廊下」と考え、24時間体制で連絡が取れるようにしています。たとえ一人暮らしであっても、認知症になってもがんになっても、「この地域に住んでいてよかった」と言ってもらえるよう取り組んできました。

今回のタウンミーティングの後は、伊賀並さんや鹿取さんのご厚意により、昼食を用意していただきました。伊賀並さんたちが伊吹の渓流で釣ってきたイワナのから揚げなど、地元の食材を使ったおいしい料理に、



▲グループワークの様子、司会は学生



▲班ごとに学生から発表



▲万傳寺の敷地内にある出張診療所

みなさん大変満足していただけたと思います。『食』を通したおもてなしの心が、学生さんたちの胃に強烈に伝わったものと思います。ご厚意、本当にありがとうございました。

学生さんたちが将来医師になったときに、患者さんは病気を持った特別な人ではなく、同じ人間同士であることを常に感じてほしいと願います。医師としての技術や知識を持ちながらも、心を通わしあえる温かい人間味のある医師になってほしい。また「学生時代、伊吹にきたことがあったなあ」と頭の片隅に思い出してくれれば、ありがたい。

今回訪問してくれた学生さんはどの学生さんも、非常に真摯で優しい人たちでした。このような若者であれば、私たちも安心して歳をとって若い世代に任せることができるなあと思いました。またいつか会える日を楽しみにしています。いつでも遊びに来てください。貴重な機会をありがとうございました。



公民館での昼食の様子

■ 地域研修を受け入れて

地域包括ケアセンター いぶき 看護師長 水上 幸子



▲交流会でお話される水上さん

夏季宿泊研修に来られた頃は、まだまだ猛暑でしたが、伊吹はすっかり秋らしくなってきました。

今回、地域包括ケアセンターいぶきでの地域研修は、学生さんたちと一般住民の方と交流していただく機会ができました。米原市上板並地区の万傳寺でのタウンミーティング、住民有志による郷土料理の昼食会がありました。

私は昼食会のお手伝いをさせていただきました。ミーティングから昼食会まですべて企画していただいた地域住民のボランティアの方には、大変お世話になりました。学生さんに地域の料理をぜひ食べさせたいという思いから、1ヶ月以上前から、何度も岩魚を釣りに出かけておられました。その他の湖北地方での郷土料理に使う材料を集めていただきました。たくさんのボランティアの方たちも朝早くから来ていただき、掃除、料理の仕込み、盛り付けなどすべてしていただきました。料理も大変好評で、十分満足していただいたと思います。

これも、地域を知っていただきたい、これからの未来を担う医師、看護師にがんばってもらいたいという住民の方たちの思いからでした。礼儀正しく、将来をしっかり考えておられる学生さんたちに、住民の人たちは感心しておられました。「日本の未来も捨てたものじゃない……。」と口々に話しておられました。学生さんたちは、伊吹の地で何か感じていただけたでしょうか？

私自身も前日の懇親会から参加させていただき、貴重な経験となりました。いろいろな経験を経て医学部に入学された学生さんや、先生方のお話をきかせていただき、医療への熱い想いを感じました。学生の皆さんにはがんばっていただきたいとの一言につきます。滋賀医科大学地域里親学生支援事業の里親の一人として、また住民の一人として今後の学生さんたちのご活躍を期待しております。



▲お話しされるケアセンターいぶき 臼井先生

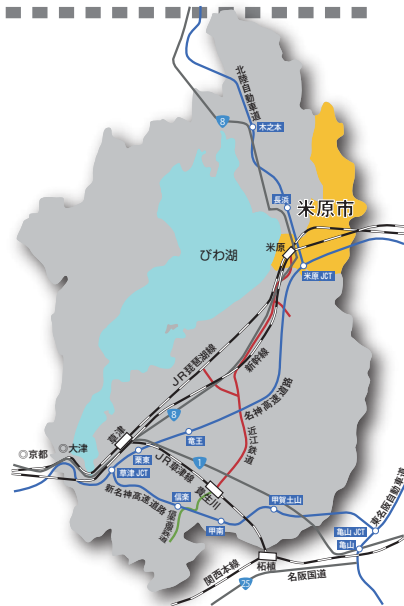
地域自慢 ③

～米原市 水源の里 山村原風景の村～

米原市は鉄道、名神高速道路、複数の国道の交通網の結節点（ハブ）です。特に米原駅は東海道本線、北陸道本線が通り、県内唯一の新幹線停車駅で東京まで2時間30分、新大阪まで35分の抜群のアクセスを誇ります。

米原市の総面積の63%は森林が占め、細長い形状のため湖岸部と中山間地では自然環境が大きく異なります。北部は1メートル前後の積雪のある豪雪地帯です。

伊吹山を頂点に南北に連なる山々、山里に降り積もった雪は、森林に貯えられ、清流となって地域を流れびわ湖に至ります。上板並は山々に囲まれた水源の里であり、水と緑に包まれた自然豊かな古き日本の原風景といった風情の村です。



住民の40%が65歳以上の高齢者で少子化も進み、人口の減少は止まりません。それでも村には人々の支えあいの心があり、誰に言われることなく援助を必要とする人の見守りが成立しています。隣の長浜市には市立長浜病院、長浜赤十字病院の二つの総合病院があり、地域では包括ケアセンターいぶきが診療所を運営してくれています。入院に至らない病気はケアセンターで診てくれますし、介護を要する人の入所も受け入れてくれますので、医療的には恵まれた地域であると思っています。



過日、当地のお寺を会場に、滋賀医科大学・自治医科大学生の皆さんと地域医療の現場を知る研修（タウンミーティング）が行われました。参加した住民の方から、この前の座談会は若い人と話が出来て楽しかったよとの声を多くいただきました。

私もケアセンターいぶきの畑野先生からの依頼で、お手伝いをさせていただき、ワークグループに分かれて車座での話し合いに参加しましたが、医学生の方々の頭の回転の速さ、合理的な考え方、短いミーティングから要点をまとめて、グループ発表を堂々とこなし、知性だけではなく礼儀正しく常識のある真の賢さにはびっくりしてしまいました。主に18～20代の若い人達でしたが良い医者になるという目標を持って人生を歩んでおられ、このような人達が、将来お医者さんになってくれるのなら安心だと感じました。医学生の皆さんにエールを送りたいと思います。



文：米原市 上板並 在住
伊賀並 正 信

訪問先の皆様からのメッセージ

研修を受け入れて・ 交流会に参加して

彦根市立病院
院長 金子 隆昭



本年8月28日に、滋賀医科大学と自治医科大学の学生の皆さんをお迎えしました。皆さんの自己紹介の後、彦根市立病院がいかに関地域の救急医療に携わっているか、そして病院で働く医師、特に女医さんにとって働きやすい職場とは、またその取り組みについての話がありました。他職種がチームを作って医療を展開する、いわゆるチーム医療を知っていただくため、糖尿病チームのカンファレンスを見学していただきました。ちょっと珍しいケースを提示され、皆さんの勉強にもなったのではないかと思います。その後、緩和ケア病棟とヘリポートの見学をしていただきました。ヘリポートは、いつ学生さんを案内しても満足してもらえる彦根市立病院自慢のエリアです。琵琶湖、彦根城、伊吹山を一望できる雄大なパノラマを満喫していただけたのではないのでしょうか。夜はグランドデュークホテルで交流会がありました。当院の日村副院長から在宅医療に対する取り組みの話がありましたが、高齢化が進行し、在宅療養する方が増えてくると、彦根市立病院としても在宅医療に取り組んでいかなければなりません。その後、交流会の席となりました。ひこにゃんの特別参加もあり、たいへん

盛り上がった会となりました。

学生の皆さんは、今回の研修を通して地域医療、在宅医療に

取り組む医師の姿を見て、いかが思われたでしょうか。医師の偏在が取り沙汰されていますが、地方には地域の住民のために貢献している医師がいます。若い皆さんには是非とも地域医療、在宅医療に積極的に取り組んでいただきたいと思います。



交流会に出席して

彦根市立病院
内科部長 來住 優輝



8月末に行われた宿泊研修で交流会に参加させていただきました。まずは宿泊研修に参加された学生さん達の地域医療に対する熱意としっかりした考え方に驚かされました。私の学生時代は約20年前に遡りますが、ヨット部の活動を通して多くの仲間と寝食を共にし、かけがえのない時間を過ごしました。一方で自分が志す医師像については、「臨床医」という漠然としたものでした。宿泊研修という取り組みが彼らに良い機会を与え、良医の育成に寄与しているのだと実感しました。

私は学生時代の仲間と一緒にフィールドで仕事をしたいという思いで滋賀県に残ることを決めました。仕事を始めて右も左もわからない時期には、医局の先輩から厳しくも丁寧に指導していただきました。そして勤務した病院では周囲のスタッフに助けていただいて現在に至ります。人の育成には人のつながりが何よりも大切だと身をもって教わりました。今後もより多くの学生さんに参加していただき、そこで生まれたつながりによって一人でも良い医師が育つよう祈っております。



訪問先の皆様からのメッセージ

病院見学を
受け入れて公益財団法人 豊郷病院
院長 薦本 尚慶

二期生の私が、滋賀医大に入学した頃には大学仮校舎は守山にあり、あぜ道を徒歩で通学したのを覚えています（女学生が自転車通学で転倒して田んぼに落ちたこともありましたが）。夏に瀬田の現在の校舎に移転した時も駅からキャンパスまでは田んぼが多く田舎でした。そんな環境の大学生活で、少人数ですが和気藹々と過ごした学生生活が大変懐かしく思い出されます。おそらくここに来ておられる皆さんの学生生活とは環境がかなり異なっていると思います。

私は兵庫県姫路市出身ですが、大学近辺の地域（当時は町で会う人のほとんどが顔見知りでした）の方々との交流の中で自然に第二の故郷として滋賀に住み、大学では卒後循環器内科に入局、臨床研究をかじり平

成22年より、地域医療を支えるために豊郷病院で働いています。

見学会を企画された大学関係者の中に、私の同期生の永田 啓教授も来ていますが私と同じような気持ちで、大学とともにこの人材育成機構で活動されていると思います。

このような機会を通じて、滋賀県の地域医療を担われる若い学生さんとお会いできて幸いです。豊郷病院の特徴は友吉唯夫名誉教授がお話になりましたが、詳しくはホームページ(<http://www.toyosato.or.jp/>)をご覧ください。私も、友吉先生も講義で大学にいくことがあります、見かけたら気軽に声をかけて下さい。

皆様をお迎えした、豊郷町公認のキャラクター“よいとちゃん”とともに、また数年後に成長された皆様にお会いできることを楽しみにしております。



宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科1年生 伊藤 哲郎

正直、参加前は彦根城とひこにゃんという地域医療を学ぶということよりも観光に気を取られていた部分も大きかったのですが、彦根市立病院ではカンファレンスの見学や緩和ケア病棟の見学、ケアセンターいぶきでは地域の方々と直接語り合う場所を設けていただいたり、最後の豊郷病院では精神科病棟を見せていただくなど、普段の座学では得られない貴重な体験をさせていただきました。さらに、滋賀の地域医療という目標を同じくする自治医大の学生さんと色々とお話できたのが一番の収穫でした。また彼らと再会できることを楽しみに、これからも機会が許す限り参加していきたいと思っています。

そして、私たちが短時間の見学をさせていただく為に非常に多くの方々事前に準備され、温かく迎えていただいたことに心から感謝するとともに、私たちが将来の地域医療を支えていくことへの期待をひしひしと感じました。また、実際に活躍されている先生の表情からは求められている所で仕事をする事の幸せについても感じました。これから医師として自立するまでには先は長いですが、今回感じた温かい期待に応えられるよう努力していこうと、モチベーションが上がる良い研修となりました。

滋賀医科大学 医学科3年生 木村 優香

今回は4回目の参加です。

今回の研修で特に勉強になったのは、地域の方の生の声を聞いたことです。

二日目の午前中、ケアセンターいぶきに通っておられるお年寄りに集まっていたいただき、お話する機会を設けていただきました。その中で、普段の生活についての本音を伺えたと思います。

例えば、米原のこの地域は冬になると積雪がひどいこと、寒さのなか、雪をかき分け、屋根に登り雪を落とさなければならぬこと。それは特に一人暮らしの女性にとって、肉体的に非常に厳しいです。しかし驚いたのが、それ以上にそのことが、精神的な負担になっているということです。調子の悪い時は憂鬱で、ふさぎこんでしまうこともあるそうです。それでもこの地域が、地域の人々が好きでここに居たいとおっしゃっていました。

医療者として患者さんをどのように支えていくべきか、そのヒントは普段思っておられることや辛かったこと、嬉しかったことなどに隠れているのではないのでしょうか。

このような機会を設けていただき、ありがとうございました。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科1年生 関口 尚人

今回の研修旅行で滋賀の地域医療に触れることが出来ました。特に印象的だったのが万傳寺での交流会でした。ここで感じたのは地元の方の畑野先生への信頼でした。皆さん現在の医療体制に満足され先生に感謝されていました。しかし、同時に将来への不安も抱いておられました。もし歩けなくなったら在宅医療が出来るのか、もし先生がいなくなったらどうなるかなどでした。今は先生たちや市の職員の方の働きによって地元の方に安心感をもたらすことが出来ていますが、医師の数が十分だとは言えません。先生たちに続く医師が必要とされていると感じました。医師への必要性は万傳寺だけでなく、訪問する先々で感じたものでした。それぞれの場所で皆さんとても熱心に魅力を伝えて下さいました。一緒に地域をよりよくしようという職員の方の気持ちを感じました。僕は今回の研修で感じたことを忘れませんし、何らかの形で還元していかなければいけないとも思いました。今回このような貴重な体験をさせて頂き研修に携わって頂いたすべての方に感謝しております。

自治医科大学 医学科1年生 小嶋 克

今回の研修には、普段の大学における座学だけでは学べない地域医療について学べると思い参加しました。今回は実際に彦根市立病院や豊郷病院といった医療施設に出向き、そこでどのような医療やサービスが提供されているのかを知る良い機会となりました。ただ単に病気を治すだけでなく、患者さんが病院で快適な生活を送れるようなサービスが行われていました。私はまだ1年生で医学の知識が無い中での参加となりましたが、実際の病院ではどのような医療サービスが求められているのかということを知ることができ、医療を学ぶ心構えをみにつけることができたと感じています。また、伊吹の集落の住民の皆様と交流させていただく機会を与えてもらい、滋賀県の僻地と呼ばれる地域に初めて行かせてもらいました。大学の先生からレクチャーしていただくだけでは分からない僻地の住民の方の素朴な考えを聞かせていただくことができ地域医療についての問題点について深く考えることができました。今回の研修だけでなく他の医療施設との比較の中で気づける事もあると思うので、機会があればまた参加したいと思います。

自治医科大学 医学科4年生 八坂 寛之

今回も地域で医療をすることの魅力を感じることもできるとてもいい研修でした。

ケアセンターいぶきを訪問した際にはタウンミーティングの場を設けていただき、地域の魅力やケアセンターと住民との関わりについて、上板並地域の住民の皆さんから直接お話を聞くことができました。ご近所どうし助けあひながら生活する人情味あふれる地域の雰囲気や、地域の医師と住民の方々が日頃から厚い信頼関係で結ばれている様子がとてもよく伝わってきました。

米原市の行政の方、彦根市立病院の先生による講演では、高齢者が在宅で安心して暮らせる地域包括ケアに向けた取り組みや、患者情報共有化などによる病診連携の推進など、地域医療を支える様々な仕組みがあることを学びました。

今回の研修では、「ひこにゃん」や「よいとちゃん」の歓迎を受けたり、地域の住民の皆さんの手料理でもてなしていただいたり、市や病院のトップの方から直々にお話をいただいたりと、関係者の皆様の地域医療への意気込み、我々医学生に寄せる期待の大きさを感ぜられました。そうした思いに応えられるように、しっかりと医学を学び、また地域医療への関心も持ち続けたいと思います。

滋賀医科大学 医学科1年生 馬場 達也

宿泊研修には初めて参加しました。私は岐阜出身なので米原・彦根地域はよく通るのですが、実際に滞在したことは今までほとんどなかったため今回の研修はとても楽しむことができました。特に初日に行った伊吹山は、岐阜県民にとっては冬に伊吹おろしという冷たい風が吹きつける少し嫌な山ですが、夏に行くと色とりどりの花々や壮大な風景を楽しむことができ、冬の伊吹山とは全く違う表情にとても驚きました。

また、彦根市立病院、豊郷病院、地域包括ケアセンターいぶきの見学もさせていただき、とても勉強になりました。万傳寺で行った地域の人たちとの交流会ではお年寄りたちと膝を交えて話しあい、上板並地区の特色やその地方ならではの医療についての意見を聞くことができてよかったです。

今回の研修では自治医科大学の学生さんが4人も参加してくれて、夜には自治医科大学の話も色々聞くことができておもしろかったです。たった2日間でしたが、色々なことを体験できてとても有意義な研修となりました。ありがとうございました。

滋賀医科大学 医学科1年生 北川 奈津子

私は今回初めて、宿泊研修に参加させていただきました。せっかく滋賀県にある大学に通っているのに滋賀県のことを知らないのはもったいないと思っていたので、とても良い機会になりました。

私が特に印象に残ったのは上板並地区の方々との交流会でした。都会に住んでいてはあまり感じることもない地域の人たちとの結びつきや、地域包括ケアセンターいぶきのような地域に密着した医療の重要性やありがたみについて知ることができました。





宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科3年生 高塚 淑子

今回で4回目の参加になります。

彦根市立病院、豊郷病院の説明と見学、地域包括センターいぶきでのタウンミーティングのほか、伊吹山登頂、彦根城見学、交流会でのひこにゃん登場サプライズなど、盛りだくさんの内容でした。また自治医科大学から今回4人の方が参加され、交流もできました。

とくに地域包括ケアセンターいぶきは一年生の時に『夏のワークショップ』で実習させていただいており、それ以来の訪問となりました。今回は米原市上板並地区の方々とタウンミーティングを設定していただき、また地元の食材を使用した料理をいただくことができました。上板並地区は医療施設がなく、ケアセンターいぶきの出張診療が週に一回あるだけで、しかもその診療所は医療器具が何もない小さなプレハブの建物です。冬には積雪が多いため、若い人は職場近くに転居している人も多いようです。

タウンミーティングでは、地区での生活について「遠方から嫁いできて、全く知り合いがなかったけれど、周囲の人たちがとても親切にしてくれたので耐えることができた」こと、一人暮らしの高齢の女性は（職場近くに住む息子に心配かけないように）できるだけ歩くようにし、畑仕事も自分でしたり、ケアセンターいぶきに通うのもバスを利用していることなどを語られました。また私たちの昼食のために朝から川魚を釣ってくださって、たくさんのおいしい料理を出してくださいました。地区のみなさんのそれぞれが周りの人を気遣い、いたわり合って生活されていることがよくわかりました。そしてこのような周囲の人への気遣いやいたわりが、地域の人々の目線であり、地域の人々の目線にたった医師とは、周囲の人への気遣いやいたわりを医学の知識を使って行う人なのだろうと思いました。

滋賀医科大学 医学科1年生 河原 早苗

私は今回初めて宿泊研修に参加させていただきました。研修のプログラムには、医療施設見学と地域の名所巡りがバランスよく含まれていたため、地域の人々の生活とともに医療について学ぶことができましたと思います。

研修で最も印象に残っているのは、米原市上板並地区の方々とタウンミーティングです。お元気な住民の方とお話することは少ないので貴重でした。美しい上板並地区を愛し、守っていききたいという住民の方々の思いがとても強く感じられました。そこでの医療は決して最先端の高度医療ではないけれど、住民の生活に根づき、強い信頼関係のある、まさに地域医療だと思いました。

滋賀県出身でも、なかなか他の地域の医療や風土に触れることはないもので、すごく良い機会でした。また違う地域にも訪れて、様々な体験をしたいです。

自治医科大学 医学科1年生 青山 智俊

この宿泊研修に参加したのは、これまで住んでいたにも関わらず、実は私はあまり滋賀県のことを知らないのではないかなと思ったからであり、この研修では、滋賀県の「医療面」に加えて、各地域の「文化」に触れることもできるということが魅力的だと考えたからです。それぞれの地域で展開されている医療は決して同じではなく、そこで必要とされる医療の形態がその地域の風土に合わせたものになっていることを、伊吹で住民の皆さんと話したことでより一層感じました。この研修は、地域医療に対するイメージを変えてくれるものであり、私たち学生にとって必要な時間を提供してくれました。将来医師になる人間として、貴重な体験をさせて頂いたことに、関係者の皆様には大変感謝しています。

滋賀医科大学 医学科4年生 西野 裕香

彦根・米原方面への宿泊研修に参加させて頂いたのは、私が一年生の夏以来、二度目になります。一年生の時は何もかもが目新しく、訪れた病院や伊吹山、彦根城（そしてひこにゃん…）、すべてが鮮明に記憶に残っています。

この3年半の間、滋賀県の全ての地域を研修で回り、地域ごとの特色や、また各地域の共通点なども学んできたつもりです。その経験をした後に、再び彦根・米原地域における地域医療に触れられたことは、私の大きな財産となりました。

一年生の時に書いた、研修旅行後の感想文に私は以下のように記しています。

「今、何が求められているのか、医療者として自分がその地域に何が出来るのか、常に問うことを忘れない医師になりたいと強く感じた」

3年半経った今も、この気持ちを忘れないでいられるのは、里親研修にコンスタントに参加させて頂いていたからだ改めて感じています。

最後になりましたが、今回の研修にご協力・ご尽力下さった多くの皆様に厚く御礼申し上げます。

自治医科大学 医学科1年生 松村 裕

宿泊研修に初めて参加し、貴重な体験をさせていただきました。

彦根・米原方面の病院・観光地を回ったということで、最も印象に残ったのは、米原市上板並地区の方々とタウンミーティングでした。この地域の方々にとって、この地域の診療所である「地域包括ケアセンターいぶき」が生活の安心を支えている要であるのだと感じ、地域での医療の重要性を認識しました。

また病院のほかにも、伊吹山や彦根城などを観光し滋賀の魅力を新たに発見することができました。今回の研修で学んだことを今後の勉強に活かしていきたいです。

ありがとうございました。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科4年生 沖 達也

宿泊研修には前回の甲賀・湖南地域に引き続き、今回で2回目の参加となります。今回の研修では彦根・米原方面における、様々な形の医療を目にすることが出来ました。

救急医療に力を入れておられ、彦根市を中心として周辺4町に15万人が住む医療圏での救急をほぼ全て担っておられる彦根市立病院。それとは対照的に、精神科やリハビリに力を入れておられる回復期病院の豊郷病院。そして、地域の皆様に寄り添う形の医療を展開されておられる地域包括ケアセンターいぶき。そのような、一地域を支えるそれぞれ役割の異なった医療施設をまわらせて頂くことで、その地域全体の医療システムを捉えることが出来たように思います。

また、今回は訪問先で多くの先生方、そして地域の方々とお話しする機会を設けて頂きました。いつも医療者側と患者側という2つの視点から物事を考えるよう教わっている私たちにとって、そのどちらの立場でもない地域の住民の皆様とお話をする機会というのは非常に貴重であり、また地域医療を考えていく上で非常に有意義な体験となりました。

滋賀医科大学 医学科1年生 藤井 麻梨子

今回初めて宿泊研修に参加し、幾つもの貴重で充実した体験をさせていただきました。その全てが鮮明に思い出されますが、その中でも私は、米原の山奥に暮らしておられる人々と直接お話し、そこでの暮らしや文化、医療について生の声が聞けたことが最も印象深く、地域医療について考えさせられる良い経験になりました。米原の山奥に住んでおられる人々は訪問診療所という小さな施設で生活に必要な医療を受けておられます。そのシステムの利点は近くに診療所があることで地元の住民が安心できることや、遠くの病院に通う負担がなくなることです。地元の人々の今の思いや、今後の不安を聞くことで、人々が安心して生活できる地域づくりには何が必要か、何を改善していくべきか深く考えさせられました。また、生活環境が異なると必要な医療も異なる、その地域に見合った生活の支え方があることを知りました。地域の人々の温かな繋がりを感じることもできました。宿泊研修は貴重な体験を通して自分の感性を磨き、志を高められる良い研修です。今後も是非参加したいです。

滋賀医科大学 医学科3年生 久保田 浩之

今回の宿泊研修では、彦根、米原方面の医療施設を訪問させていただいた他、伊吹山、彦根城を訪れたり、市役所、保健所や住民の方と懇談する機会もいただき、彦根、米原地区を多面的に理解することができたと思います。大学のある大津市や草津市とは、産業、人口動態や気候の点で異なることを実感し、滋賀県の持つ奥深さの一端を知ることができました。伊吹山の麓にあるお寺の境内で住民の方とお話しさせていただいた時、これから医師となって支えていく人の存在を実際に心に刻むことができました。



滋賀医科大学 医学科1年生 大東 親生

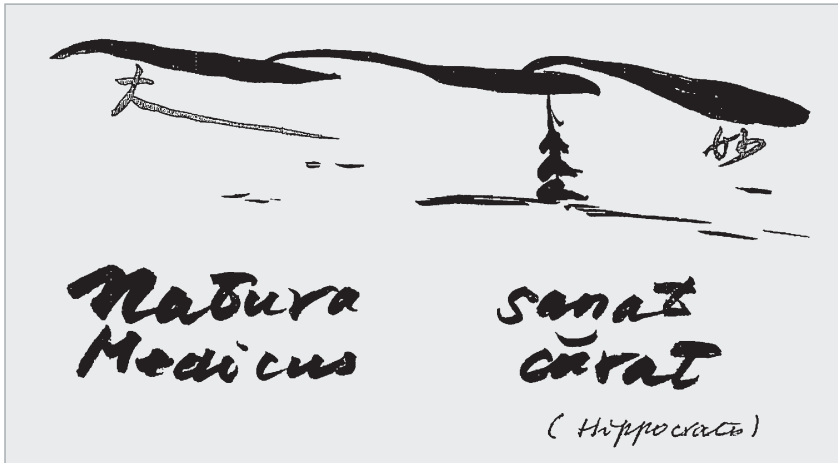
宿泊研修に参加させて頂くのは今回が初めてとなります。各所の名所・旧跡に訪れたのはもちろん素晴らしい経験でしたが、何よりも医院、診療所を見学し、地域の住人の方々にお話を伺えたのは何よりも嬉しいことでした。

医療機関の見学が興味深いものであるのは言うに及ばず、学生の身の上にて地域の住人の方々のお話を伺うのは、専門家のフィルターを通さずに医療を眺めることができること、相手に専門家に対する遠慮を持たせずに話が聞けること等において有益だと思います。今回の活動は私にとって、医療へのイメージをより明確化し、医学への動機を強めてくれるものになったと思います。

医療機関へは、彦根市立病院、地域包括ケアセンターいぶき、上板並診療所、豊郷病院を見学させて頂きました。とくに上板並においては地域の住人の方々地域について思うところ、また医療について思うところを話してくださいました。上板並地区は高齢化が進んでいること、地域に若者が就職する場が少ないこと、しかし比較的近辺に長浜市民病院等の大きな病院があり、ケアセンターいぶきとの連携があるので、医療的には恵まれた地域と思われること、こうしたことは地域を知る上で興味深いことでした。時間があれば、住友大阪セメント伊吹工場のことも伺いたかった。工場がかつて地域の文化に深く関わっていたのか、関わっていたならどのような印象を地域の方は有しておられたのか、知りたいと思ったからです。地域の色を知することは、医師としても他の職業と同じく、重要なことに違いありません。職業や生活様態もまた、疾病や健康状態に関わると思うからです。

上板並の方々には地域の料理、わさびいなりやイワナのでんぶら、まつたけご飯もご馳走になりました。いずれも滋味深く、特にわさびいなりの、口にしたらたん鼻が通るような、わさび菜の持つ爽やかな辛みは、実に絶品でした。そうした素晴らしいご飯をいただきながら、滋賀医科大学の学生ということで、ここまで心を尽くしてくださるということに感謝と責任を感じたものです。国費で勉強する身の上の意味は、こうしたことでもあるのでしょうか。

教養課程のうちは医療に関わる経験を積む機会が少なく、医学への意欲を維持しがたいこともあるかもしれませんが、私も数学や物理が苦手ですので、時折悩まないでもないですが、こうした経験があれば初心を思い出すという意味においても、自らの道を進むという意味においても、利益は少なくないと思いました。



総合人間研究所 所長
早川 一光

Natura sanat Medicus curat (Hippocrates)

〈自然が治し、医療がこれを支える（ヒポクラテス）〉と、僕も医学生の時、教わった。
講義が細分化されて詳しく病気の因果を学ぶにつれ、疾患を引き起す原因が 細菌、ウイルス、細胞の変性、果ては免疫力に及んで来て、ますます 迷路に入り込んでいく。

そして「よく分ったようで 結局 何も分らなくなって」 苦しまぎれに

「検査の結果、異常がありませんから、病気ではありません」

と言い放ってしまう。

「それでも 先生！」と問いつめられて

「**年ですなあ〜**」とその人の越してきた年令のせいに押しつけてすましてしまう。

“加齢性……” という診断がまかり通る医療ですが、患者さんは 心から納得してはいない。

「治してもら 治してあげる」という医療者と患者の人間関係の中で、医療が行れている間は、この問題は解決できない。――

滋賀医科大学での私の授業で、私は 医の道を志す新入生と 看を目ざす 看護学生に、びわ法師の語りを聴いて頂いた。

そして 平家物語の一節と

宮沢賢治さんの詞を

びわの音と共に 聴いてもらった。

京在住のびわ法師に 出演を頼んだ時、**僕行く** と快諾されたこの方の体の反射に

「あ！ これが患者が求めている医療だ!!」

と思った。

病気だけでない。生活につかれた人あれば

“行って診てくる” と体が先に動く感性こそ **医の原点** とみた。

異変あれば その枕元に駆けつけ、寄り添う心こそ 私達が一生、忘れてはならない **心** だと知った。

早川 一光

1924年(大正13年) 生まれ／ラジオパーソナリティ／医師
「総合人間研究所」所長
公益社団法人「認知症の人と家族の会」顧問
KBS京都ラジオで「早川一光のばんざい人間」放送中
平成18年～ 滋賀医科大学非常勤講師

病院の名前は知っているが、どんな病院か全く知らない方が多いのではないのでしょうか。

このコーナーは、そんな地域のみなさまや医学生・看護学生のみなさまに、滋賀県内の医療機関を知ってもらうために設けました。シリーズ第3回に引き続き、県内臨床研修指定病院から自己紹介していただきます。

社会医療法人 誠光会 草津総合病院

病院の概要

開設者：社会医療法人 誠光会

院長：理事長兼院長 桑原 正喜

開設：昭和57年(1980年)

病床数：719床

診療科目：内科、循環器内科、消化器内科、神経内科、呼吸器内科、糖尿病内科、内分泌内科、内視鏡内科、人工透析内科、腎臓内科、心療内科、小児科、小児外科、外科、消化器外科、乳腺外科、心臓血管外科、呼吸器外科、脳神経外科、整形外科、リウマチ科、皮膚科、アレルギー科、形成外科、耳鼻咽喉科、頭頸部外科、眼科、泌尿器科、産婦人科、放射線科、放射線診断科、放射線治療科、リハビリテーション科、麻酔科、ペインクリニック内科、救急科、歯科、歯科口腔外科、病理診断科、臨床検査科、甲状腺外来、禁煙外来、腹膜播種センター、肺がん・呼吸器疾患センター、頭頸部・甲状腺外科センター、脳神経センター、心臓血管・心不全センター、消化器センター、周産期センター、PET画像センター、内視鏡治療センター、透析センター、健康管理センター、高気圧酸素治療センター、救急医療センター、地域災害医療センター

指定施設：滋賀県災害拠点病院、滋賀県地域医療支援病院、滋賀県地域がん診療連携支援病院、滋賀県重症難病患者医療拠点病院、厚生労働省臨床研修指定病院、厚生労働省外国医師臨床修練指定病院、日本医療機能評価機構認定病院 (Ver6.0)、病院群救急輪番参加病院、滋賀県救急告示病院、開放型病院



草津総合病院・全景

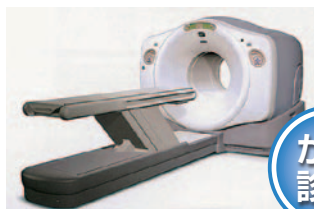
理念

誠心誠意を尽くし、一隅を照らす光のごとく人々に幸せをもたらす医療を行う。

基本方針

1. 365日・24時間救急体制、内科・外科系 2科当直制。
2. 地域住民に信頼され、安心と安全な医療を提供します。
3. 患者さまの権利を尊重し、患者サービスの充実を図ります。
4. すべての医療関係者と緊密な関係を保ちます。
5. 地域の中核病院としての役割を担います。
6. 質の高い医療人の育成に努めます。

病院の特徴



PET-CT

がん
診療

救急
診療



災害
診療



DMAT隊

在宅
診療





モバイルCCU

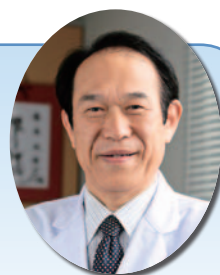


滋賀県国民保護共同実動訓練の様子

湖南がん診療ネットワーク
ミーティングの様子

院長メッセージ

草津総合病院 院長 桑原 正喜



草津総合病院はJR南草津駅から約2.3km琵琶湖寄りの湖畔に地上9階、地下1階、屋上ヘリポートを備えた延べ床面積5万平方メートルの建物で、許可病床数は719床を有する大規模総合病院です。

病院には、ICU/CCU、NICUや外来化学療法室、手術室などの設備をはじめ、PET/CT、3T&1.5TMRI、MDCT、リニャックなどの高度医療機器が備えられています。厚生労働省臨床研修病院（基幹型）、地域災害拠点病院、外国医師臨床修練病院、滋賀県がん診療連携支援病院、地域医療支援病院の認定や承認を受け、また、日本医療機能評価機構認定病院でもあります。

2008年9月に社会医療法人に移行して『地域医療を守る公益性の高い病院』の使命感の下に当院の基本理念である『誠心誠意の医療』『一隅を照らす光の如く、人々に幸せをもたらす医療』を実践しています。

開設している40診療科では1日平均外来患者数668人、1日平均入院患者数626人、手術数3,328人（全麻2,178人）、救急車受入数2,969件、病床稼働率は83%、在院日数（急性期）平均15.2日（2012年統計）で、救急医療、がん診療、災害医療（DMAT）を中心として、common diseaseから先進医療（肥満外科）や高度専門医療（腹膜播種外科センター）に至る、幅広い医療を提供しています。

医学生やコメディカルの学生の皆さん、このように良好なアメニティーとハードとソフトを備えている草津総合病院で臨床修練してみませんか。草津総合病院では診療間の垣根も低く、状況に応じて診療の小回りが利き、幅広い医療が経験できます。こんな環境の中で自分の力を存分に発揮してみませんか。

見学や実習のご希望があれば、医局支援室（森田室長補佐）に連絡していただければ、調整のうえで可能です。朗らかで、モラルの高い人を歓迎します。

看護部長メッセージ

草津総合病院 看護部長 阿部 邦子



看護学生の皆さんこんにちは。皆さんは現在、大学や専門学校で看護の基本を学び、専門職になるための準備をしていることと思います。そして最大の関門である国家試験も突破しなければなりません。無事に国家試験に合格し、看護師免許を手にしたとしても、まだ一人では何もできない看護師さんです。何もできない看護師さんから、できる看護師さんになるためには？ どうしたらいいのでしょうか。草津総合病院では新人教育に選任者を置き、一人一人の性格や能力に応じた教育をしています。以下、三つ特徴を紹介します。

- ① 胸に新人バッジを付け、一年間、周囲から温かく見守ってもらいます。
- ② 初夜勤は他院では6月頃？ 当院は9～11月頃に個人に合せ開始します。
- ③ 看護師長から両親に「〇〇さん頑張ってます！」の写真つきハガキを送ります。



社会医療法人 誠光会 草津総合病院

所在地：〒525-8585

滋賀県草津市矢橋町1660

TEL：077-563-8866

FAX：077-565-9313

URL：<http://www.kusatsu-gh.or.jp>

併設施設 デイケアセンター（通所リハビリテーション）
指定居宅介護支援事業所ふれあい
訪問看護ステーション
訪問リハビリテーション

誠光会グループ

介護老人保健施設 草津ケアセンター
草津看護専門学校

高島市民病院

病院の概要

病 床 数：210床（一般206床、感染4床）

診療科目：18科

内科、循環器科、外科、小児科、整形外科、
耳鼻いんこう科、産婦人科、精神科・神経科、
皮膚科、泌尿器科、脳神経外科、放射線科、眼科、心臓血管外科、リハビリテーション科、
麻酔科、歯科、歯科口腔外科



「研修環境と研修プログラム」

当院は、約200床と研修病院の中では小規模であることから、職員間の距離感が非常に近く、すぐに打ち解けて温かい家族的な雰囲気の中で研修に集中していただくことができます。特に、全科でワンフロアの医局内に研修医のデスクがあり、指導医の先生方だけでなくどの診療科の先生方とでも、いつでもコミュニケーションをとることができます。

診療においては、救急部門が独立した部署ではないため、救急で診た患者さんを、それぞれの専門医の先生のサポートを受けながら、初診・入院中・退院調整まで担当することができます。

また、当院では、院内での研修と並行して学会や講習会に積極的に参加できるよう、これらへの参加を出張扱いとしてその旅費や参加費を支給する制度を設け、研修医をサポートしています。

当院の研修プログラムは、医師としての土台作りに配慮したプログラムとしています。特に、当院の地域が抱える高齢化社会と医療の在り方の問題は、今まさに医療に投げかけられている全国的な課題であり、地域に根ざした医療・介護・保健福祉について、へき地診療、在宅医療、介護の実際の現場を通して経験できます。

1 年 次					
4月～6月	7月～9月	10月～12月	1月	2月	3月
内科	救急医療	総合診療科	小児科 産婦人科	産婦人科 小児科	外科

2 年 次			
4月	5月	6月～8月	9月～3月
地域医療（へき地医療・在宅医療・介護）	精神科	内科	選択研修



臨床研修医指導風景



災害訓練の様子

「医学生のみなさまへ」

高島市民病院 病院長 高山 博史



高島市民病院は、平成24年4月に新病棟の完成とともに新たに誕生した病院です。翌25年5月には健診棟、駐車場などの周辺施設の完成も加ってグランドオープンしました。当院は、免震構造を有し、病室、手術室、外来フロアなどの内部環境は、最新の病院にふさわしいアメニティにあふれ、高度な医療設備を備えています。

大病院ではありませんが、初期臨床研修においては、むしろ当院規模の地域中核急性期病院が適しているという評価があるのも事実です。これからの新卒の医師は将来的にどのような専門性を志向しようとも日本が直面する史上例を見ない超高齢化社会における医療問題に否応なしに立ち向かわされることになるでしょう。そして、これまでの医学部教育にはそのような視点が欠けているとの指摘もなされています。従って、超高齢化社会が抱える医療問題に対する見識と対応力を獲得しておくべき時期は、初期臨床研修期間であると言えます。高島地域は県下でも最も高齢化率が高く、そして早く推移している地域です。超高齢化医療に立ち向かっていくことが求められる若き医師に医療の原点を学んでいただく環境がすべてであるのが高島市民病院の大きな特徴でしょう。多様な症例の経験、救急医療、身につけるべき必須の医療技術が、人的にも動的にも密度が高く小回りの利く環境で効率的に習得できるだけでなく、在宅医療、へき地医療も含めた医療の原点を学んでいただけたと思います。将来どのような専門の道を歩まれるにせよ、卒後2年間そのような環境に身を置かれることは、これからの医師にとってしっかりとした土台となり、財産になると考えます。

「看護学生のみなさまへ」

高島市民病院 看護部長 小谷 清美



当院では、中規模病院ならではの「見える関係づくり」をモットーに、4年前から新人看護研修に取り組み、集合教育やローテーション研修を行っています。集合教育では、医療機器の取り扱いや臨床工学技士が、薬剤については薬剤師が講師となるなど、病院全体で新人を育てる環境を作ってきました。入職半年後には、2週間ごとのローテーション研修（結構人気です！）を行い、初めての体験、感動や想いを語り合い、看護についての振り返りを行っています。教育も看護と同じ、その人の成長する力を引き出すことだと思い、職場のプリセプターや先輩看護師が見守り、支えることで個々の成長を応援しています。



「助産・母性看護実習について」

県下でも高齢化率がトップレベルの高島市ですが、年間350人の赤ちゃんが出生しています。高島市では、分娩施設が当院のみとなり、地域における周産期管理は益々重要になっています。地域の妊産婦さんはもちろんのこと、里帰り出産の方にも安心して安全な出産をしていただくため、熟練した産婦人科医師のもと、小児科や麻酔科医師のフォロー体制も整え、万全の分娩管理を行っています。

県下の助産実習・母性看護実習も年間を通して受け入れており、知識・技術が臨床実習と結びついていくような指導と、学生さん自身の母性・父性をより豊かなものにできるよう心掛けています。

助産・母性看護実習施設が減少する中、当院は、これからも看護職を目指す方たちを積極的に応援していきます。



○道路アクセス

【大阪(茨木)から】名神高速道路京都東インターより国道161号線を北進。所要時間＝約1時間10～20分
【京都から】西大津バイパス、国道161号線を北進。所要時間＝約45分～55分

○鉄道アクセス

【大阪から】JR東海道本線(湖西線経由)敦賀行・新快速にて近江高島駅下車。徒歩1分。所要時間＝約68分
【京都から】JR湖西線・新快速にて近江高島駅下車。徒歩1分。所要時間＝約38分

〒520-1121 滋賀県高島市勝野1667番地
電話 0740-36-0220
FAX 0740-36-8058
E-mail takashima-hp@city.takashima.shiga.jp
URL <http://www.city.takashima.shiga.jp/tmh/index.html>



保健師とは

健康を保てるように、相談や環境作りを行います。感染症や生活習慣病、精神疾患などの疾病の発症予防・早期発見・重症化予防を行います。また、しょうがい（身体・知的・発達・精神など）の早期発見や生活への支障が少なくなるように支援します。本人だけでなく、本人を支える家族や地域の人なども相談や支援の対象となります。健康を保てるような環境づくりを推進しています。

行政や産業分野、教育現場などで幅広く活躍しています。

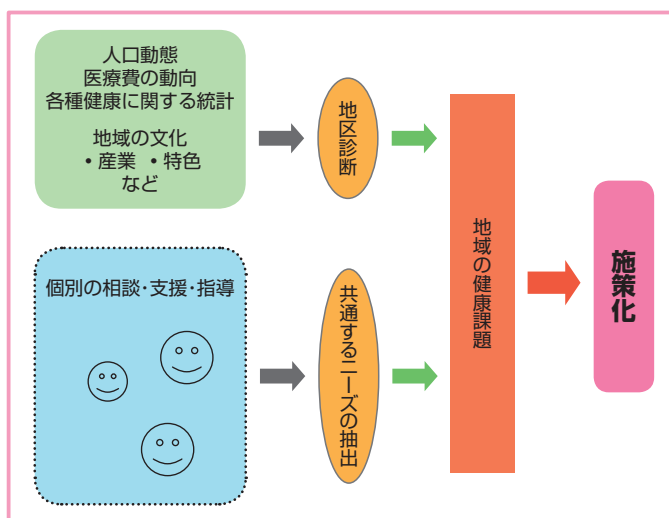
★保健師の仕事

保健師の多くは、市町村などの地方行政で仕事をしています。そこで、行政での保健師の仕事を紹介します。

保健師はその地域の特徴や文化、人口や医療費の動向を元に地区診断と呼ばれる分析を行い、地域の健康課題を見つけ、その課題の解決に向けて様々な施策を行います。

また、個別の相談や支援、指導を通して、共通するニーズを抽出して施策化しています。

地域の健康課題を元に、健康を保てるような環境づくり・街づくりを行います。例えば、タバコを吸う人が多くいて、どこでもタバコを吸うことができる環境なら、喫煙者は増え、受動喫煙で健康を害する人も増えるでしょう。喫煙の有害性を啓発して禁煙を勧めたり、さまざまな場所での分煙や禁煙を勧めることで、タバコが原因となる疾病を減らしていくことができます。



ヘルスプロモーション セルフケア行動を確立するプロセスを支援し続ける



▶図解ヘルスプロモーション（島内、1987）を一部改

疾病の早期発見（二次予防）のため、健診（乳幼児健診や生活習慣病健診、がん検診など）を行っており、さらに重症化予防（三次予防）のためにさまざまな健康教育や個別での保健指導をしています。これらの中には法律で義務付けられている業務（たとえば、母子保健法の定める乳幼児健診など）もあります。

相談・支援については健康上の問題がある方やさらに健康になりたい方が対象です。生まれる前か



▲写真は生活習慣病予防のための運動教室の場面です。

らお亡くなりになるまで、その地域に住んでいるすべての人を対象に相談や支援を行っています。また、日本人だけでなく地域に在住されている外国人の方の支援もしています。「健康上の問題」とされるのは、単に疾病ではありません。しょうがいや家族などの親しい人との関係の問題(例えばDVや虐待など)も対象です。本人だけでなく、本人を支える家族や地域の人たちに対しても支援を行い、保健師以外の専門職や他の部署と連携してチームを作り多角的に支援していきます。

★ 学生のときにぜひ！

学生のときにぜひ、現場を見てください。私自身、現場でいきいきと活動されている先輩の話を見聞きしたことが、行政保健師になる大きなきっかけになり、就職後の活動にも影響を大きく受けました。

また、クラブ活動でも実習でも何でもよいので、仲間と何かをやり遂げる経験をしてください。仕事は一人ではできません。様々な人々とチームを作り仕事を進める力やコミュニケーション能力が必要とされます。

さらに、広い視点をもつようにしましょう。保健師は看護学の知識だけではなく、社会学や経済学、法律に関することや街づくりに関すること、さらには心理学など幅広い知識が要求されます。専門職は自分の専門分野からの視点に集中しがちです。色々なことに興味をもてるとよいです。

★ 最後に

保健師の仕事は、イメージしにくいかもしれませんが、健康なまちをつくるという大きな仕事ができます。また、近年は男性の保健師も増えてきました。ぜひ、興味をもたれた方は現場の保健師活動を見てください。医療の現場に進まれても、生活の場では保健師が支援していますので、連携してください。

文：福 永 ま き 絵

長浜市役所 健康福祉部健康推進課 保健師
滋賀医科大学看護学科卒業(2期生)

熊澤 孝久

滋賀医科大学開学時より、縁の下の力持ちとして御活躍いただき、また、里親学生支援事業が始まった時からの学外室員でもある、熊澤孝久氏からお話をお聞きました。



〈滋賀医科大学とのかかわりについて〉

昭和49年10月に滋賀医科大学が守山の仮校舎で開学しました。この大学は医学部をもたない滋賀県が県議会の議を経てできた大学です。当時県職員であった私は、「滋賀県民の希望でできた大学が、どのように今進んでいるのか、どのように育っていくのかちゃんと見届けたい」と、県の一職員として思っていました。

【当初、県議会で承認されていた滋賀医科大学の所在地である大津市瀬田月輪町は、土地ころがしの問題が生じ、大学校舎を建設できませんでした。取りあえずは、守山市にある今は滋賀県看護専門学校となっている建物を仮校舎として昭和49年10月に開学しました。現在の津市瀬田月輪町に大学校舎の一部が建ち、この地に引っ越しに来たのは開学後約2年を経た昭和51年8月でした。】

そのような思いを持っていた矢先に、私の職場で、「滋賀県に医科大学が来たからには、医学生が解剖実習をしないといけないが、ご遺体があれば解剖ができない。このご遺体はお金では買えない。そこで、滋賀県民が登録をして、ご逝去後は学生に解剖をしてもらう滋賀医科大学しゃくなげ会（篤志献体の会）を設立したので、十分考えて入会してほしい。」と、初代しゃくなげ会の常務理事であった大原伴五氏（元県会議員）の会員募集の説明を聞き、昭和52年2月14日に登録番号129号でしゃくなげ会に入会したのが、滋賀医科大学とのかかわりの始まりでした。昭和53年10月に開院した附属病院も、県民として利用するとともに見守っていこうと思っていました。

〈自称応援団になられたのは〉

その後、大原氏の推薦でしゃくなげ会理事となり、活動のお手伝いをさせてもらい大学に顔を出すうちに大学の色々な事情が分かるようになってきました。

医学教育はいままでの講義中心の授業から、患者・医師関係に関する厳しい訓練を組み入れる流れとなってきました。当時の臨床前実習世話人の産婦人科野田教授より、「模擬患者役を他大学では学生にさせることが主流ですが、滋賀医大では患者役を県民の皆さんにやってもらえないか。」との話が持ち上がり、「滋賀医科大学模擬患者の会」ができました。私も平成12年から模擬患者役をしています。

平成16年に国が定める臨床研修医制度が変わったことで、都市部の病院で研修を希望する学生さんが多くなり、滋賀県の医師が足りない事態が生じました。そのような中で滋賀県に残って立派な医療人になってもらいたいといった趣旨の元、できた「里親学生支援事業」。

学生さんが海外へ勉強に行かれる、また留学生が日本に勉強に来られる際の経済援助をおこなう「滋賀医学国際協力会」。

そういったところで役員をさせていただくことになり、自称「滋賀医科大学応援団長」と言っていました。

一方、附属病院に目を向けると外来ボランティア、院内図書室のボランティアなどがあることを知りました。縦線でボランティアをやるのも勿論大切なことですが、横の連絡も取りながら滋賀医大を



応援できないものかと、その当時の吉川学長に相談したところ、元滋賀医科大学職員の桑村 隆さんを紹介してもらい、周りの方々の協力を得て「滋賀医科大学ボランティア連絡協議会」を発足し、自称ではなく実際に「滋賀医科大学応援団長」にならせていただいたのです。

〈NPO法人滋賀医療人育成協力機構の活動について〉

先に述べました里親学生支援事業のお手伝いとして、機構の活動にも参加しています。

滋賀県内各地での宿泊研修では、参加された学生さんがその地域の方々と交流の場を設けてもらうことは大切です。

また里親さんは、県内で勤務または開業されている医療関係に従事されている人になりますが、プチ里親さんは、一般の人が学生さんと交流を持ってもらい滋賀県の良さを学生さんに知ってもらい、滋賀県に残ってもらうことが役目ですので、しゃくなげ会の会員さんも何人かはプチ里親さんです。

学生さんは、滋賀へ来たからには滋賀県に骨を埋めていい医療人になるんやと思って欲しいと、私達支援者は欲の深いことを思っていますが、一度はどちらかに行かれても滋賀県を忘れないで帰ってきてもらって、いいお医者さんになってもらえればと思っています。

滋賀県の場合は、まだまだ都市型の県ではないので、町医者が何でもみてるお医者さん、家庭医が必要じゃないかと思っています。



▲H24.8 宿泊研修交流会2部にて

〈これからの人に伝えたい事〉

滋賀県の大学に進学した、またこの土地に生まれたことも御縁です。この御縁を大切にいただき、全ての学生さんはすぐに滋賀県の医療人として働いてほしいとはいいいませんが、県外に出ていかれる方も、いつかは滋賀県にもどって、働いてほしいと思っています。

滋賀県は日本の真ん中、その真ん中に住んでいる県民の皆さんは立派な医療人を育てていくことに協力をしてほしい。また、県民の希望でできたこの大学と病院にいつまでも関心を持って欲しい。と思っています。

昨年末より下喉頭がんと連れ添っています。たとえ病であっても出来る限り自分らしく活動が続けて行きたいと思い、平成25年5月12日に生前葬をやった後も、大津市社会福祉協議会、滋賀医科大学、NPO法人びわこダルク、滋賀刑務所の仕事のほか、口伝行脚といって自分の思いを口で伝えることと、歩き回るを足して、私が生きている間に私が思っていることの話を知りたいと言って、呼んで下さるグループへ出向いてしゃべらせてもらっています。このように、ご縁のある方々のお支えのお蔭で、一日一日を自分らしく感謝し過ごさせていただいております。



▲しゃくなげ会のことをいろいろとお世話下さった中森愛子さん(NPO法人滋賀医療人育成協力機構 事務局長)と

プロフィール

1931年(昭和6年)2月生まれ
滋賀県職員(広報課長、労政課長、婦人相談所長を経て)を1988年(昭和63年)に退職
「あなたの傍に私がいます」熊澤こころの相談処開設
大津市民生児童委員 8期23年
滋賀県介護保険苦情処理委員長 10年
京都新聞社会福祉賞受賞 平成24年度
現在は、大津市社会福祉協議会心配ごと相談員、NPO法人びわこダルク理事長、滋賀刑務所篤志面接委員、滋賀医科大学ボランティア連絡協議会会長、滋賀医科大学しゃくなげ会(篤志献体者の会)副理事長、滋賀医学国際協力会監事、滋賀医科大学里親学生支援事業学外室員、NPO法人滋賀医療人育成協力機構監事等の重責を担う。

「滋賀県医師キャリアサポートセンター」のご案内

平成24年9月1日、滋賀県と滋賀医科大学との協力により、国の医師確保政策の一環として、滋賀医科大学医学部附属病院内に「滋賀県医師キャリアサポートセンター」が設置されました。

滋賀県は厚生労働省が実施した3師調査（医師・歯科医師・薬剤師）によれば全国47都道府県中、人口10万人当たりの医師数が第35位であり、人口が増加傾向にあるため相対的に医師の少ない地域であります。全国的な医師偏在による地域基幹

病院の診療崩壊

が報じられていますように、同様の事情にある滋賀県においてもこれを打開するため、県内への医師定着を促進することを目的に発足しました。

滋賀県医師キャリアサポートセンターは、県から研修資金、奨学資金を受給している研修医、医学生あるいは奨学金受給には関係なく、滋賀県で将来医療に従事したいという希望を持つ医学生の方々へ、魅力ある専門医取得に向けた県内基幹病院循環型の研修コースの提供、既卒医師に対する病院斡旋、あるいは出産・育児により、休業した後に復帰を考えている女性医師の方への復帰訓練や職場の斡旋などを行い、広角な医師確保・医師キャリアディベロップメントセンターとしての役割を果たそうという総合的リクルートセンターです。



ぜひ、ホームページ

【<http://www.shiga-med.ac.jp/~ishicsc/>】 をご覧ください。

メール会員にもどうぞ、ご登録ください。最新情報を発信いたします。

お申し込みは E-Mailによりセンターまでお願いします。
メールアドレス

【ishicsc@belle.shiga-med.ac.jp】



来春3月は、大津・湖南地域への宿泊研修を実施します！

来年3月に実施します宿泊研修では、大津・湖南地域を訪問し文化に触れさせていただくとともに、地域の病院等を訪問し医療従事者や地域にお住まいの方々との交流を図ります。

学生さんのご参加をお待ちしています。



滋賀医科大学学園祭『若鮎祭』において、本機構の活動内容等を展示しました

10月26日(土)～27日(日)に開催された滋賀医科大学学園祭(若鮎祭)では、滋賀医科大学里親学生支援室との合同ブースを設けました。

ブースでは、宿泊研修や、本機構の活動内容等の掲示を行ったほか、宿泊研修におけるご講演や、機構広報誌「めでる4号」に御投稿いただきました 早川一光先生の授業風景のビデオを上映しました。

雨天の中をご来場いただきブースにお立ち寄りいただいた皆さま、ありがとうございました。

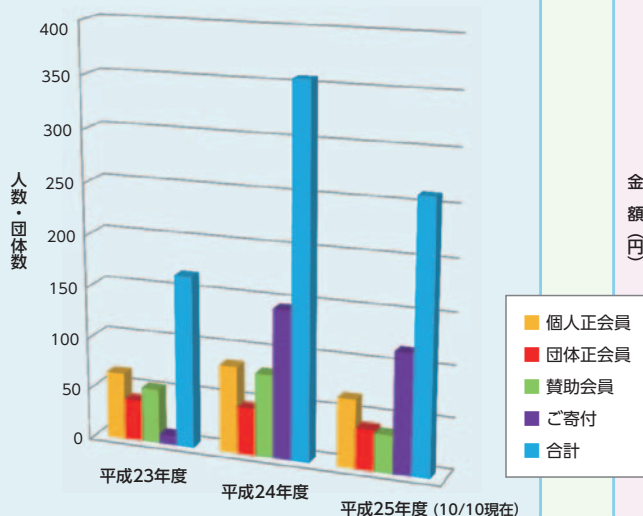


会員の状況

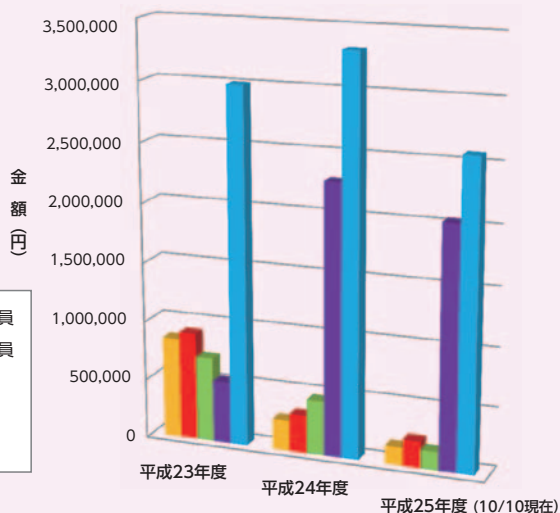
平成23年7月4日に設立しました滋賀医療人育成協力機構も今年で3年目を迎えます。設立後は、滋賀県内の医療機関をはじめ、多くの皆さまのご協力でご理解をいただいております。

今後とも、地域医療を担おうとする医学生・看護学生の志を育む活動を進めさせていただきますのでよろしくお願いします。

会員の状況



会費の状況 入金額



入会のご案内

周囲の方にも、
一声おかけ下さい。

皆様からの会費と寄附金を財源として、活動を進めてまいります。

ご入会いただくことにより活動が成り立ちますので、ご協力いただける方は、機構事務局（077-548-2802）へご一報ください。HP（<http://www.shiga-iryo-ikusei.jp/>）からも入会可能です。

正会員：本機構の目的に賛同して入会いただく個人または団体
（総会での決議権を有します。）

正会員の種類	会 費		入会金（初年度のみ）
個 人	正会員費 2,000円	寄附金 3,000円以上	5,000円
団 体	正会員費 5,000円	寄附金 5,000円以上	10,000円

賛助会員：本機構の目的に賛同いただいた個人または団体
個人・団体とも、1口1,000円以上をお願いします。
できましたら、認定NPO法人としての基準を満たすため3,000円以上をお願いします。

ご寄附：機構の活動資金として皆様からのご篤志をお願いします。
できましたら、認定NPO法人としての基準を満たすため3,000円以上をお願いします。

滋賀医療人育成協力機構は、本機構への寄附者が税制上の優遇措置を受ける事のできる「認定NPO法人」になることをめざします。

編集後記



今年は、台風による豪雨災害の多い1年となってしまいました。

特に9月15日・16日にかけて日本列島を縦断した台風18号では、今まで経験したことのないような豪雨により、滋賀県内では河川の決壊や山崩れなどの大きな被害を受け、復旧にはまだまだ時間がかかるような現況です。被災されました皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。

さて、今夏の彦根・米原方面の宿泊研修では、米原市上板並地区にお住いの皆さまの御協力により、学生の皆さんは心温まる経験をさせていただきました。また、研修には自治医科大学生が4名も参加いただき、大学間の交流もできたことと思います。

猛暑の中、研修を受け入れていただきました医療関係者の皆さまをはじめ、御協力いただきました米原市・彦根市の職員の皆さま、米原市上板並地区にお住いの皆さま、本当に有難うございました。

話は変わりますが、今回この活動を通してうれしく思ったことの1つに「めでる4号」を県内の高等学校に送付した10月のある日に、卒業後は医療関係への進学を希望される高等学校生徒さんから、本機構の活動に興味があるので活動内容等の情報を得たいとの連絡を受けたことです。

来年3月には晴れて希望どおりの進路に進まれ、本機構の活動に参加されますことをお祈りするとともに、機構誌編集では、高等学校生徒さんも読んでいただける内容の充実を図りたいと思います。

これからも医療関係者のみならず、県民の皆さまの温かい御協力により、学生の皆さんと地域との絆が生まれることを祈りながら、活動を続けて参りますので御協力、御鞭撻をお願い申し上げます。



メディカルめでるちゃん

NPO法人滋賀医療人育成協力機構 広報誌「めでる」vol.5

発 行：平成25年12月1日
編 集：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構
所 在 地：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
T E L：077-548-2802 FAX：077-548-2803
Email：satooya@belle.shiga-med.ac.jp
U R L：<http://www.shiga-iryo-ikusei.jp/>